

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 渡邊 啓貴



学位申請者：Lin Wei（リン・ウェイ）

論文名：Skills and Training Required for Museum Professionals in the Changing Environment Surrounding Museums –Cases in the United Kingdom-
(和訳タイトル：ミュージアムを巡る環境変化において美術専門家に必要なスキルとトレーニング - 英国の事例 -)

<審査結果>

Lin Wei（リン・ウェイ）氏の博士学位請求論文「Skills and Training Required for Museum Professionals in the Changing Environment Surrounding Museums –Cases in the United Kingdom-（和訳タイトル：ミュージアムを巡る環境変化において美術専門家に必要なスキルとトレーニング - 英国の事例 -）」は、英国の美術専門家（ここでは館長と学芸員を指す）の職務形態・能力を主たるテーマとする論文である。このテーマについてはわが国でも研究が進んでいない分野であるので、本論文の稀少価値は高い。

とくに美術館をとりまく外部環境の変容を踏まえながら、美術館そのもののあり方と関連して、美術専門家の技能（スキル）がどのように変化しているのか、を丹念に論述した好論文である。また本論文では美術専門家の技能育成についても、美術専門家の学歴・取得学位などを自分で収集したデータを用いて検証することによって、解明を試みている点も大変興味深い点であると評価された。

なお後述するように、先行研究の分析や仮説設定に関してもう一步踏み込むべきであったという指摘はあったが、それが論文そのものの意義を大きく損なうものではない点で、審査委員会は合意した。

以上のことから、審査委員会は Lin Wei（リン・ウェイ）氏の学位請求論文は本学大学院が学位授与のために定めた基準を満たしていると判断した。

<本論の主旨>

リン・ウェイ氏は本研究において、英国の美術館に従事している美術専門家（ここでは館長と学芸員を指す）の職務形態等及び職務能力に着目し、美術館をとりまく外部環境が変化する中で、美術館運営、展示企画、来客対応等、美術専門家に求められている技能（スキル）がいかに変化してきているのかを分析することを主たる目的とした。また同氏は美術専門家に必要とされる技能の育成がどのようになされているのかを、特に高等教育機関

(主に大学教育) や研究対象として各美術館が独自に行っている様々なプログラムなどを分析することによってその解明を試みようとした。

<本論の研究設問>

上記テーマを分析・解明するために本論文は以下のような諸点について問題設定をしている。

まず、リン・ウェイ氏は本論文で、今日の英国文化社会の変容にともない、美術館を巡る外部環境がどのように変化してきているのかについて概観が行ない、そうした外部変化が実際に美術館の運営・企画・サービスなどの経営戦略にいかなる影響を与えているのかを検証した。

第二に、そうした状況下で美術館に勤務する美術専門家に求められる諸技能(来客対応、企画力、展示デザイン、各種サービスの向上)はどのようなものであるかを考察対象とした。

また本論文でリン・ウェイ氏は、もし仮に、そのような外部変化に対して美術館の経営や専門家の諸技能が適切でないと判断された場合、その理由の解明と、その克服のために美術専門家に必要なトレーニングがどのようなものであるのかということについても考察を行った。

<研究方法>

上記の諸問題を解明するためにリン・ウェイ氏がとった方法論は、まずは先行研究の知見を踏まえながらも、それらを批判的に考察することであった。今日の美術館を取り巻く外部変化の状況とそれに対する美術館の運営の実態、美術専門家に求められている諸技能の現状をより明確にすることをまず考察対象とした。

本論文では主に国際博物館協会が設定した美術専門家を対象とした「スキル概念」、Curricula Guidelines for Museum Professional Development に依拠し、技能開発概念の整理と理論の構築を行ったうえで、全体の議論が展開されている。

リン・ウェイ氏は本論文では設問を詳細に分析するために現在英国美術館に従事する学芸員を対象としたアンケート質問の作成、個別調査を実施し、ケーススタディーを行った。

また英国に所在する博物館学系大学の教育内容、カリキュラム、実習形態などを、関係者への聞き取りをもとにデータを収集し、今日美術専門家に必要な知識や教養、その育成教育がどのようになっているのかを事例として分析した。さらには英国の大型美術館(政府助成美術館)の職員研修内容を収集し、その全体像の把握に努めた。

<本論文の構成>

第一章の文献レビューでリン・ウェイ氏は、ミュージアムの戦略作りとスキルやトレー

ニング理論をレビューし、先行研究に足りない部分を明らかにした。特に、英語圏で公表されている経営学やマネジメント論に関する研究論文を営利企業だけでなく、官公庁や非営利団体等を対象とするものを含めて広く渉猟した。我が国の経営学研究は、利潤追求を旨とする民間企業を対象とするものが多く、他の組織を対象とする場合でも、効率性を重視する民間企業の論理を他の組織にも応用しようとする傾向が見られるが、本論文は、そのような傾向に与することなく、様々な対象を扱った研究を詳細に検討している。特に、英国における美術館・博物館の法的地位や経営体制をよく理解したうえで、これに適用可能な経営学理論の研究動向を丹念に検討している。

第二章の方法論においてリン・ウェイ氏は、前章で考察した先行研究の動向を踏まえて、本研究に使用された方法論を説明した。まず、博物館経営論と周辺諸学の関係を示しながら、本論文が属する学問分野・方法論を説明した。経営学と博物館学は、元来異なる学問領域であり、かつ、後者は学際性が強い。これらが結合することによって生まれた博物館経営学の方法や対象は一義的ではなく、論者によって異なる。

リン・ウェイ氏の論文中では、英語圏の主要な研究に依拠しながら、博物館経営論の学問的性格を捉え、本論文が依拠する理論枠組を示した。さらに、博物館経営論の下位分野に検討を進め、種々の研究対象のうち、美術館に属する美術専門家の技能に着眼する意義を説明している。特に、英国の特徴として、高度専門職たる美術専門家の役割が大きく、その技能を要請する体制に、日本を含む他の諸国には見られない特徴が見られるとリン・ウェイ氏は主張する。そして、この点を特に扱う研究の蓄積が乏しいことを指摘し、本論文の意義として、微視的なアプローチによって、高い専門的知識を有する美術専門家がどのように育成されているのか明らかにすることを課題として提示している。

第三章・第四章の発見・分析そして討論でリン・ウェイ氏は、先行研究で見られたインタビュー調査のデータを活用した追試と著者自身によるインタビュー調査のデータの分析によって、大学や美術館の反応に至るまで様々なことを考察した。特に、美術館職員に対する研修が、美術専門家の技能向上にも資することを認めつつ、美術専門家が入職前に受けた大学院教育が担っている役割も大きいことを明らかにしている。

特に、先行研究の枠組を応用して、入職後の研修を「新人研修」「管理職研修」「経営層研修」に分類し、各範疇の研修が、どのような内容であり、美術専門家のキャリアのどの段階で行われているか・いないか、技能向上にどのように資すると認識されているか、美術専門家に対するインタビューによってリン・ウェイ氏は明らかにしている。

第五章の結論では、研究設問への回答をして総括をした。

<本論文の分析結果>

本論文は、経営学の理論を英国の博物館・美術館に適用し、美術専門家に要求される技能を分析している。我が国の経営学研究は、利潤追求を旨とする民間企業を対象とするも

のが大半を占めるが、英米圏においては、非営利組織や公営団体等も対象に含めた、広い意味での「マネジメント論」が主要な位置を占めている。博物館・美術館のマネジメントに焦点を当てた本論文は、一方でこうした英米圏の学界における議論に依拠しつつ、他方で我が国では研究が不十分な領域を補完するものである。

本論文全体を通じて明らかになったことは、今日の英国の美術専門家は「伝統的スキル」をさらに深めるのが重要という意見と、それ以外にも美術館の「多機能スキル」「経営・リーダーシップスキル」も取り入れた技能の習得が重要という意見に分かれた。また対等とした各美術館に共通することは所蔵コレクションに関する深い専門性が求められている。

美術専門家の教育・訓練については、入館前の教育・訓練はインターンシップ以外は全て大学教育によって行われていることであった。本論文で取り上げたレスター大学等以外では「伝統的スキル」の教育が主流である。大学教育の範囲を博物館学系の大学以外にも広げたところ、美術史と考古学の専門性に優れた学部などの評価が高いことが確認できた。美術館が大学に求めている教育はコレクション分野での高い専門性である。歴史的価値の高いコレクションの多い英国の大型美術館では、実践的な一般管理スキルよりも深い学術的な知見の方が重要と見なされているのである。

就業後の美術専門家訓練は各美術館によって特色があるが、「新人研修」のガイダンス的なものが大半であり、その後は職場内訓練やオプション研修が行われている。「管理職研修」では各管理職に応じた特別な研修が行われる傾向にある。「経営層研修」は実施されない場合もあるが、内容としては参加者のニーズに応じて種々のプログラムが実施されている。管理職以上の研修では、大学や第三者機関の協力を得ている。第三者機関では Clore Leadership Program の認知度が高いが、英国博物館協会による CPD トレーニングは学芸員ではなく、学芸員にキャリアアップしたい管理系職員が受けていることが分かった。

<本論文の評価される点>

本論文は今日の美術館、そこに従事する美術専門家（館長と学芸員）が、外部環境が変化する中であって、マクロ的な運営面でのスキル及びミクロ的な技能面でのスキルがいかなるものであるのか、またそうした諸スキルがどのように育成されているのかを、英国の事例を用いて解明しており、そうした点が高く評価された。日本国内では本研究がテーマとしている分野で、英国の美術館や高等教育を事例とした研究成果はまだ十分ではなく、また本論文のように、実際に職務についている美術専門家へのアンケート調査などに基づく分析はこれまでなされていないため、一定の学術的な意義があると考えられる。

また本論文は美術館学の分野だけではなく、経営論、人材育成論など経営学的な分野からの理論を用いて、実際の美術館運営などを分析している点にもユニークさがみられる。今後は本分野での研究に様々な示唆を与えるものであると考えられる。

<本論の問題点>

審査委員会では本論について以下の諸問題点が指摘された。

* 先行研究の分析の検討

先行研究の分析であるが、単なる先行研究の要約や紹介に終始している傾向があるため、さらに批判的に検討する必要があることが指摘された。

* 仮説の再設定

現在の仮説設定が厳密さに欠けるため、論文全体の論点のぶれがみられる。さらに絞り込んでいく必要性が指摘された。

・ 事例の補強

英国美術館の事例研究の数が少く、実証するためにはさらなる分析対象が必要ではないか、との指摘があった。

・ 脚注

また各章の各ページにフットノート（註）を加え、本文中には書けなかった重要事項や本文の論拠をバックアップする説明や補足、データなどを入れる必要性が指摘された。

以上、Lin Wei（リン・ウェイ）氏の学位請求論文には今後の更なる発展に期待すべき点も見られたが、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしていると審査委員会は全員合意で判断し、リン・ウェイ氏に博士の学位を授与することが適切であると判断した。